

**高等学校等における
オンライン国際交流の事例
～その他様々な国際交流の事例**



文部科学省

MINISTRY OF EDUCATION,
CULTURE, SPORTS,
SCIENCE AND TECHNOLOGY-JAPAN

その他（海外在住日本人）との連携による取組み【宮城県古川高等学校】

県教育委員会から、フランス・ヴァール県で教育文化交流を希望している団体・学校をとりまとめている、現地在住日本人担当者（ISEN工科大学日本文化研究所所長）を通じてのオンライン交流企画が本校に紹介された。本校では部活動単位（英語部）で参加することになり、双方が事前にプレゼン資料を作成し、ビデオ会議ツールを使ってライブで交流を行っている。時にはロシアの学生や教員も交える。ビデオレター交換や、SDG s に関する学び合いも今後の視野に入れている。

【プログラムの内容】

日本・フランス・ロシアの学生たちが、それぞれ事前に作成したスライドで、自国の文化や歴史等を日本語で紹介し、それに対する質疑応答を日本語で行う。スライドのテーマはさまざまで、こちらが用意したものは「和食」「アニメ」「古川高校」「有名人」「芸能」「偉人」等。お互いのやり取りの補佐的な役割として、時折英語を用いた。秋から現地の時差が変更になり、オンライン交流が難しくなり、ビデオレター交換が提案され、こちらは「日本の古典的遊び」や「修学旅行で訪れた京都の紹介」をテーマにして数分程度の動画を作成して送った。

【工夫した点】

- ・現地学生の日本語学習のサポートになるよう、スライドに日本語のルビをふったり、予習用の日本語（スライドの要旨メモ）も別に作成したこともあった。
- ・文化祭で、英語部の展示発表の一部として、こちらが作成したスライドを展示して紹介した。
- ・英語部員の英語学習のため、ビデオレターの字幕には、日本語と英語を併記した。

【今後の課題】

- ・万一、登校制限が生じても準備や参加をしやすいものにする。

【経緯】

2020(令和2)年7月	県教育委員会から、フランスの高校生とのオンライン交流についての紹介がある。
同年8月～10月	ビデオ会議ツールを用いて、5回のオンライン交流会を実施。
同年12月	こちらが作成したビデオレター（第1弾）を送る。
2021年(令和3)年1月～	フランス側からのビデオレターが届く予定。こちらはビデオレター（第2弾）を作成。



他機関との連携による取組み【宮城県泉高等学校】

フランスで長年日本語を教えている日本人の方の発案で、現地の学生と日本の高校生とのオンライン交流について県教育委員会から本校へ受け入れの打診があった。これまでの3回の交流では、フランスのみならずロシアの生徒も加わり、本校生徒会執行部の生徒延べ14名とお互いの地域・学校紹介から、ポップカルチャーをはじめとする若者文化などについて意見交換し、相互理解を深めた。

【プログラムの内容】

- ・ISEN工科大学日本文化研究所 所長 高島さんのフランス人やロシア人の教え子や知人と本校生徒との同世代間の交流。
- ・現地の生徒は各家庭からの個人参加、本校生徒会生徒は放課後に70～90分の時間で、グループで参加。
- ・住んでいる地域・学校の紹介や日常生活、またポップカルチャー等の若者文化をテーマに意見交換。
- ・互いの教員がモデレーターとして参加。

【工夫した点】

- ・欧州のサマータイム時間等を考慮して、柔軟に開始時間等を変更。
- ・次回のテーマについて、互いにPPTファイルや動画・写真を事前に準備、伝え方も工夫。
- ・フランスやロシア生徒の漢字名を習字で用意。

【今後の課題】

- ・テーマをSDGsなど世界的・社会的課題に少しずつ発展させていく。
- ・本校対象生徒を生徒会生徒から興味・関心のある希望生徒に広めていく。



【経緯】

2020年6月末	県教育委員会から本校へ受け入れの打診
2020年7月	先方と連絡を取り合い、内容について整理。校内会議で検討し、県教育委員会を通じて受け入れの回答
2020年7月末	オンラインにて教員同士の打ち合わせ実施（フランスから2名、本校から2名参加）
2020年8月19日	第1回の交流会実施 以降2回実施 今後も継続予定

姉妹校提携による取組み【宮城県志津川高等学校】

2019(令和元)年に姉妹校締結を行った嘉義県立竹崎高級中学(台湾)より、新型コロナウイルスの影響を気遣った寄せ書きと応援の品が2020(令和2)年4月に届いたものの、5月末までの学校休業の影響により返礼ができなかった。相手校の生徒は6月末で卒業を迎えてしまうこともあり、急遽感謝の思いを伝えたいと本校生徒会が企画し、ウェブ交流会を実施。本校生徒会6名と以前来校した竹崎高級中学の生徒6名が参加した。

【プログラムの内容】

- ・自己紹介
- ・新型コロナウイルスの影響を気遣った寄せ書きへの感謝の言葉
- ・こちらからの寄せ書きと、返礼品の紹介
- ・それぞれの近況や、ウイルスによる暮らしへの影響についての話し合い
- ・それぞれの校歌の紹介、ダンスの教え合い
- ・今後の交流についての確認



【工夫した点】

- ・町の観光協会と連携し、台湾出身の職員の方に寄せ書きの翻訳、当日の通訳や解説を依頼した。
- ・交流会開催までの期間がなかったこともあり、厳密なプログラムを設けることができなかったが、生徒の自発的な活動によって活発な交流につながった。



【今後の課題】

- ・今後も定期的にウェブ上での交流を重ね、お互いの国や学校の課題について話し合うなど、内容をより発展させることで、生徒の国際的な視野やコミュニケーション能力を醸成させる活動にしていきたい。



【経緯】

2019(令和元)年5月	嘉義県立竹崎高級中学との交流会実施(本校にて)
2020(令和2)年2月	嘉義県立竹崎高級中学と姉妹校提携を締結
同年4月～6月	新型コロナウイルス感染拡大に際し、寄せ書き・応援の品を贈りあう
同年6月17日	ウェブ交流実施

他機関との連携による取組み【宮城県仙台東高等学校】

本校では毎年11月上旬に「グローバルウィーク」を設定し、国際的に活躍される方の「国際講演会」、外国人講師を招いての「異文化理解講座」、訪日団の招聘を行い、学校全体で国際理解に関する意識を高揚させる行事を設定している。今年度は留学エージェントの協力を得、本校に年度当初オーストラリアから留学予定であった生徒と、現在台湾に留学している卒業生とをオンラインで結び、現地や学校の紹介、オンライン見学・インタビューを行った。

【プログラムの内容】

- 本校に長期で留学に来る予定であった生徒との交流
 - ・本校から留学生への学校紹介・・・制服、教室、授業等留学生が体験する予定であったこと、クラスメイト等を可能な限り英語で紹介。留学生からの質疑と応答。
 - ・留学生からの街の紹介・・・現在留学生が住んでいるオーストラリアの街をバーチャルで散策と紹介。
- 本校から留学した卒業生との交流
 - ・台湾留学のメリットと学校の紹介、街の紹介
 - ・留学を考えている後輩たちへのメッセージ



【工夫した点】

- 日本より-1の時差の台湾と、+2の時差のオーストラリア(東海岸)との時間調整。
- 留学エージェントと連携し、航空機の搭乗からをバーチャルで体験させ、現地ならではの食べ物も用意し、より臨場感、直接的な体験になるような設定を行った。



【今後の課題】

- 一過性のものにならないよう、留学意欲や異文化理解への意欲が継続するよう計画する。

【経緯】

2020年3月	卒業生の台湾留学が決定・渡航
2020年9月	派遣予定の留学生の留学中止を検討
2020年10月	オンラインプログラムの実施を検討・エージェントによる事前通信 留学生・卒業生との事前打合せ、参加生徒への連絡と事前指導
2020年11月	オンライン交流 エージェントと本校教員による指導 分析と反省





他機関との連携による取組み 【宮城県富谷高等学校】

本校は2014年10月にユネスコスクールの承認を受け、様々な国際交流の活動をしてきている。そのうちの1つとして、一般財団法人ジャパンアートマイルの「アートマイル国際協働学習プロジェクト」（通称アートマイル）に2015年から参加。このプロジェクトは、事務局がマッチングした海外のパートナー校と、インターネットを使って対話的・協働的に学び合いをしていくものであり、今年度は6月から2月までの期間で実施。

【プログラムの内容】

- ・アートマイルへは今年で6回目の参加。相手国はベルギー。
- ・6月に事務局で相手国のマッチングがされ、事務局が運営する『フォーラム』というSNSを使って2月まで相手国と交流する。7月はお互いのメンバー紹介、8月はお互いの国についての調べ学習、9～12月は「教育」「平等」「環境」などの世界が抱える問題について学び合いをする。海外の同世代と共にSDGsの達成のためには何ができるかを一緒に考える。
- ・12～2月は、共有した想いや伝えたいメッセージを1枚の壁画(1.5m×3.6m)に描く。壁画制作のしかたは、まず本校が壁画の半分を描いて海外のパートナー校に送り、パートナー校が残りの半分を描くという方法である。完成した壁画は、パートナー校での鑑賞会が終了した後に、本校に送付されて戻ってくる。本校で鑑賞した後は、事務局に送付する。



【工夫した点】

- ・お互いの顔や声を届けるために、動画撮影をしてSNSで共有。また、SNSでの交流では、すぐに返答（リアクション）をすることを心がけた。

【今後の課題】

- ・時差や県のサーバーの制限の課題をクリアして、リアルタイムでの交流。

【経緯】

2014年10月	ユネスコスクールの承認を受ける
2015年4月	ユネスコスクールHPで「アートマイル国際協働学習プロジェクト」を見つけて応募
2015～2020年	2015年インドネシア、2016年カナダ、2017年パキスタン、2018年タンザニア、2019年スロバキア、2020年ベルギーとの交流
2020年4月～	今年度のフォーラム（SNS）への本校とベルギーの合計の書き込みは101回（2021年2月4日現在）

他機関との連携による取組み 【宮城県石巻高等学校】

東日本大震災を機に発足したKizuna Across Cultures (KAC) という米国NPO法人が運営する「Global Classmates」というプログラムを活用。本校は、2012(平成24)年度の第1回からこのプログラムに参加しており、今年度で9年目になる。

【プログラムの内容】

「Global Classmates」は、教育用SNSサービス(Schoology)を使用して、日本語を学ぶアメリカの高校生と英語を学ぶ日本の高校生を対象とした、オンライン文化言語交流プログラムである。海外にいる同世代の生徒たちと、幅広いトピックについて、写真や動画なども交えながらコメントを交換し合う。また、このプログラムには、「Omiyage Exchange」というプレゼント交換や英語でのショートムービーを作成して発表する「ビデオ甲子園」などの企画もある。「ビデオ甲子園」は、今年度は中止になったが、昨年度は本校の応募作品がグランプリを受賞した。



【工夫した点】

- ・時差14時間ある相手校との打ち合わせ。オンライン会議で生徒たちが「知りたい」「話したい」と思えるようなトピックを精選する。
- ・今回、初めてZoom Meetingに挑戦し、参加者からは好評だった。



【今後の課題】

昨年度(令和元年度)までは、1学年の1クラスだけをGlobal Classmatesにして、英語の授業の中で活動する形態で実施していたが、他クラスとの整合性が困難なことから、今年度(令和2年度)から、3学年の英語選択クラスで実施することになった。しかし、対象生徒が3学年になると受験日程との兼ね合いがあり、生徒たちの負荷においてまだ若干課題が残る。

【経緯】

2012(平成24)年	本校英語科教諭の呼びかけで、生徒の希望者を対象に放課後中心の活動でGlobal Classmatesに参加
2014(平成26)年	1学年の英語科教諭が担当する1クラスをGlobal Classmatesに参加させる形態に変更
2019(平成31)年	初めて「ビデオ甲子園」に応募し、グランプリを受賞。 https://kacultures.org/global-classmates/video-koshien
2020(令和2)年	対象生徒を3年の英語選択クラスに変更。初のZoom Meetingを実施。

独自の交流プログラムによる取組み【仙台白百合学園高等学校】

ポーランド学生とのオンライン交流

6人1グループになり、互いの文化や学校の紹介を行う。(1時間) *ズームを使用

【プログラムの内容】

- 中1 ①身近なところから世界を知る ②ポーランドの学生との会話、交流を通して国や文化を超えて友好関係を築く
中2 ①身近な生活と世界のつながりを考える②オンライン交流を通して国民性の違いや共通点を見出し国際理解に関心を持つ
高校1年 ①オンライン交流を通して国民性の違いや共通点を見出し国際理解に関心を持つ
(高校1年：11月実施、中2：12月実施 中1：1月実施)

【工夫した点】 1) パワーポイントでの学校紹介を英語で行う。2) 挨拶や会話は基本的に英語で行うが、ポーランドの生徒は日本語を学びたいので、日本語も交える 3) グループにわかれてミーティングにはいる

【今後の課題】 1) WIFI環境 2) 時差 3) 質問内容



【経緯】

2011年3月	東日本大震災後に励ましの手紙が本校に送られる
2012年7月	第1回ポーランド日本語学校の生徒受け入れ
2013年3月	第1回ポーランド友好訪問
2013年12月	第2回ポーランド日本語学校生徒受け入れ 以降 相互交流がコロナ前の2019年まで続く

学生会議の校外の参加による取組み【山形県 学校法人 羽黒学園 羽黒高等学校】

本校の国際コースでは国際舞台で活躍できる人材育成のため、毎年3月にニューヨークで行われる国連国際校の学生会議や、横浜市立横浜商業高等学校主催のYokohama Student Forumに参加し、積極的に国際交流を推進してきた。そこで、“Think Globally, Act Locally.”の考えのもと、生徒が主体となり、「Haguro Youth Meeting 2020」を8月1日に開催した。

【プログラムの内容】

「Haguro Youth Meeting 2020」のテーマは“Life with Coronavirus”「コロナウイルスと私たちの生活」。国際コースの1、2年生及び特進コースの希望者（約40名）が参加し、新しい生活様式の中、私たちにできることなどについて話し合った。

【工夫した点】

コロナウイルスの感染拡大を鑑み、外部から講師を招かずに行ったが、以前、本校に留学をしていた留学生（フランス1名、チェコ1名、アメリカ1名）とGoogle Meetを活用し、各国のコロナウイルスの状況をプレゼンテーション。国により、コロナウイルスへの対応や考え方の違いに触れることが出来た。

【今後の課題】

時差により、参加が難しい留学生もいる。例年より規模を縮小しての会議になったが、来年度は講師の方の専門的な話を聴く機会を設けたい。

【経緯】

1992(平成4)年3月	国連国際校学生会議 参加 一回目
2000(平成12)年12月	Yokohama Student Forum 参加 一回目
2005(平成17)年8月	Haguro Youth Meeting 一回目 テーマ：私たちが抱える問題と21世紀への課題
2020(令和2)年8月	Haguro Youth Meeting 16回目 テーマ：コロナウイルスと私たちの生活





他機関との連携による取組み【福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校】

- 原子力災害を経験し、復興途上の地域にある学校として、地域でも世界でも「学びを止めない」意識をもって実践を重ねた。
- 海外研修（1年次ドイツ、2年次ニューヨーク）の代替として国内研修を行うと共に、渡航先で議論・交流予定だった国連日本政府代表部・米国9.11家族会・NY市職員、ミュンヘンのErnst Mach Gymnasium校の学生とオンラインにて意見交換を行った。
 - 高校2年次の授業において、Global classmates(Kizuna across cultures)を活用したRoswel High school（アメリカ）との半年間の交流プログラムを行った。
 - Microsoft Innovative Educator Expertの国際ネットワークを活用したマレーシア/トルコ等の生徒との3ヶ月間のプロジェクト学習を中心としたオンライン交流を行った。
 - 高校1年次の授業において、Flipgridというアプリを使い、アメリカのNorth Salinas High Schoolで日本語を学ぶ生徒達と、日本語・英語を用いた動画による交流を行った。

【工夫した点】

- 自らの地域や日本・世界が抱える課題や、COVID-19感染拡大に伴って顕現化した課題に共通項を見出し、自分たちの活動を解決策の一つとして活用することを含めてプレゼンテーションを行うようにした。
- FlipGridを活用した非同期でのオンライン交流（非同期であるため英語が苦手な生徒でもコミュニケーションがとりやすかった。）
- SNS（Schoolgy, Facebook）を活用したテキストベースの交流（写真や動画を利用でき、スマホ等でいつでもアクセスできるので活発なやりとりができた。）
- ZoomやTeamsを使った同期でのオンライン交流も自然と行うことができた。



NY研修（オンラインによる意見交換会）

【今後の課題】

- 海外の生活文化を肌で感じることや、言語外情報も活用して相手との合意形成を図るような経験はオンラインで補完することはできない。現在のような状態が続くのであれば、オンラインで交流を行うノウハウを蓄積していくことは1つの課題であり、渡航が可能になった時には事前研修としての活用も期待される。また、新しい生活様式のもと、国内でそのような経験をいかに補完していくかも課題である。
- 単なる文化交流だけではなく、国際的に共通する社会問題に対する解決策などを共に探究していけるようにしたい。



アメリカの高校生とFlipgridでの動画による交流



トルコとのオンライン交流

【経緯】

2020/3/13	NY研修の渡航延期を決定。緊急事態宣言下、オンラインで事前研修を継続。
2020/5/12	NY研修の渡航中止を決定。各自の探究活動をできる形で実践していくことを優先。
2020/7/23	国連関係者及び現地市民とのオンライン対話を実施。
2020/9	Global classmatesで、アメリカのロズウェル高校との交流を開始。 Flipgridで、アメリカのNorth Salinas High Schoolとの交流を開始。
2020/10	2020年10月 Microsoft Innovative Educator Expert認定教員により、Facebook上に国際交流のプラットフォーム作成。その後パートナー校としてトルコのベシカタス高校、マレーシアのクハラ高校との交流が決定



【UHC (ユナイテッド・ハワイ・カレッジ) ・浦和実業学園高等学校 ハワイ歴史・文化研究発表会協力 ハワイ州ハワイ観光局】

1年次から「ハワイの歴史・文化・習慣等」をハワイ州観光局の協力を得て研究させております。2年次にその研究の成果を本校の関連施設 (UNITED HAWAII COLLEGE) の協力のもとZOOMで各グループごとに発表させ、現地のスタッフからコメント・評価をいただき1位～3位の表彰を行う。

工夫した点 今後の課題

工夫：現地との打ち合わせを事前に何度も行い、生徒参加当日に問題が起こらないようにした。(ネット環境・生徒の発表手順・時間等)
課題：今後、こうしたZOOMを使用した交流を各学期最低2回は実施し、生徒のモチベーションを高めていきたい。

経緯

・2学年を対象としており、英語の授業内にて資料作成・表現力を高めるためのプレゼンテーション理論を实践。また資料作成にはLHRの時間を使い、探究学習を行う。

- 1年 7月 ハワイ研究テーマ作成
- 9月 LHRにて資料作成開始
(コロナ禍でない場合にはハワイ州観光局の講演会)
- 2月 研究内容確認
(Googleクラスルームなどを用いる)
- 2年 4月 英語の授業でプレゼンテーション能力を高める。
- 9月 代表者選定予備プレゼン大会
- 11月 ハワイ歴史文化研究発表会
- 3年 1月 研究発表資料ハワイ州知事へ毎年ご覧いただいている。



他機関との連携による取組み【千葉県立成田国際高等学校】

(1) 特定非営利活動法人パルシックと連携し、東ティモール現地スタッフとつないだ国際理解セミナーを企画した。参加希望者を募り、夏季休業中に実施、当日は登校参加・オンライン参加の双方があった。現地からは東ティモールの歴史や、コーヒー生産者支援活動などについて報告していただき、それにつづく活発な質疑応答とディスカッションで理解が深まった。その後、(2) 文化祭(例年、フェアトレード商品を販売していた)が中止になった代替として、国際交流委員会(生徒)が主体となってフェアトレード商品販売会を企画した。平日の昼休みに5日間にわたり、パルシックの東ティモール産コーヒーをはじめ各種フェアトレード商品を販売、あわせて啓蒙活動・募金活動を実施した。

【プログラムの内容】

- (1) オンライン国際理解セミナー
 - ・参加 希望生徒(37名)、卒業生(1名)
 - ・講師 パルシック東ティモール事務所代表
 - ・内容 東ティモールの地理・歴史、NGOによる支援活動、東ティモールのCOVID-19対策
 - ・進行 報告講演、質疑応答、グループディスカッション、発表
- (2) フェアトレード商品販売会
 - ・事前 講師を招聘して勉強会を実施、啓蒙パンフレットを作成して各クラスに配付した。
 - ・商品 パルシックをふくむ数団体から、コーヒー、紅茶、チョコレートなど食品・雑貨を仕入れた。
 - ・販売 生徒・職員対象に平日の昼休みに5日間にわたり開催、売上金は国際協力団体に寄附した。



【工夫した点】

- ・国際理解セミナーは、①登校しての参加、②オンライン参加、どちらでも可能な態勢をとった。
- ・パルシックが生産支援するコーヒーやハーブティーを試飲するなど、体験の要素を取り入れた。
- ・学年をまたぐグループを編制してディスカッションし、3年生のリードで議論の活性化を図った。
- ・教員と生徒が協議しながら企画を進めることで、生徒の主体性・協働性を引き出そうとした。

【今後の課題】

- ・希望者や委員会生徒が中心の課外活動であった。今後は学年・学校全体へ広げていきたい。



【経緯】

2015年(平成27年)～	スーパーグローバルハイスクール事業のプログラム開発で連携 2016年～2019年、夏季休業中にマレーシア・フィールドワークを実施 その他にも講演会(課題研究)や文化祭でのフェアトレード商品販売など、連携を広める
2018年(平成30年) 1月	JICA(地球ひろばセミナー)にて連携の実践事例を共同報告
2020年(令和2年) 8月	オンライン国際理解セミナー
2020年(令和2年) 11月	フェアトレード商品販売会



他機関との連携による取組み【都立立川ろう学校：東京都国際コンシェルジュを活用した台湾のろう学校との交流】

高等部3年生の総合的な学習の時間では、「国際理解」をテーマに授業を行っている。例年はJICAより講師をお招きして、諸外国の文化や伝統について学んでいる。それらの活動を通じ、日本の伝統・文化についても調べ、まとめることで、自国についての理解をさらに深めている。今年度は、新たに、東京都国際交流コンシェルジュ^(※1)を活用し、台湾のろう学校「台中市立啓聡学校」と交流を行った。

【プログラムの内容】

グリーティングカード交流と、オンライン交流をそれぞれ1回ずつ行った。グリーティングカード交流では、日本側からは日本の料理や行事などについてまとめたカードを送った。台湾側からは、メニュー仕立てになった料理紹介、カラフルな用紙に書かれた台湾の名所の紹介、台中市立啓聡学校の校章や、台湾の旗の色と蝶の形を模したキーホルダーをプレゼントとしていただいた。オンライン交流では、ビデオ会議システムを活用して交流を行った。交流当日は、時間が限られていたため、お互いに話し足りない部分もあったが、生徒たちからは「台湾の手話を知れてよかった」「実際に会って交流してみたい」など、交流を楽しむことができた感想を聞くことができた。

【工夫した点】

- ・オンライン交流では双方の言語の翻訳、手話通訳の流れをあらかじめ組み、共有することで、翻訳・通訳をスムーズに行うようにした。
- ・情報保障の観点から、UDトーク^(※2)を使用した、音声言語の文字化を行った。
- ・相手校と交流内容を〈自己紹介〉〈自国の手話紹介〉〈自国の料理紹介〉の3項目に絞り準備を行った。
- ・手話の動きの意味について、「ありがとう」の手話の場合、手の動きが相撲の手刀が由来している・・・など、動作の根源を丁寧に示し、自国の文化についても伝えられるようにした。

【今後の課題】

- ・適切にUDトークでの文字化が行えなかったため、接続方法や設置場所を検討。
- ・申込み当初、グリーティングカード交流とオンライン交流を別の国で考えていたが、結果として1校と年間を通した交流ができた。事前準備や製作物の観点から、1カ国1校に絞り、年間を通した交流を基本とすると良い。
- ・オンライン交流当日、内容が多岐に渡っていたため、時間が少なく、内容が流れてしまう場面もあった。手話表現の紹介はお互いにあらかじめ同じ言葉を選んでおいて、表現の違い等を確認する方がより良い。

【経緯】

2020（令和2）年4月	年間指導計画作成時、東京国際コンシェルジュ活用の検討。他国との取り次ぎや調整を行ってもらえると聞き、言語面などやり取りに対する不安をカバーしてもらえると考え、東京都国際コンシェルジュの活用を決定
同年6月	東京都国際交流コンシェルジュにグリーティングカード交流を申込み。生徒に交流校希望アンケートを実施
同年7月	交流校の決定。校内において、総合的な学習の時間担当者と英語科の教員が連携して、グリーティングカードの作成・送付
同年9月	東京都国際交流コンシェルジュにビデオチャット交流の申込み。グリーティングカード交流を実施した交流校と同じ交流校で実施決定。
同年10月	ビデオチャット交流の準備、交流を実施



【脚注】

※1 東京都国際交流コンシェルジュ

東京都教育委員会事業。東京都内の公立学校が、幅広く、自校にあった国際交流を実施できるよう、交流先となりうる海外の学校の情報提供を行い、交流相手先とのマッチング支援を行うとともに、相談の受付、交流先との外国語等による交渉、ホストファミリーの照会など国際交流に関連する業務をワンストップで行う窓口。都内公立学校は、同サービスを無料で利用することが可能

※2 UDトーク

コミュニケーションのユニバーサルデザインを支援するためのアプリ



グローバル・リーダーシップ養成研修代替プログラム開催の取組み 【学習院高等科】

ハワイ州プナホウ・スクール主催のSGLI (Student Global Leadership Institute) 2020が、COVID-19の影響により開催中止になったため、参加予定校だった慶應志木高等学校、福井高等学校と連携して、ビデオ会議によるオンライン・ワークショップを2回開催した。SGLI2020のテーマ「健康（とくにメンタルヘルス）」について各校代表の3人が取組みを英語でプレゼンテーションし、その後全体で意見交換等を実施。

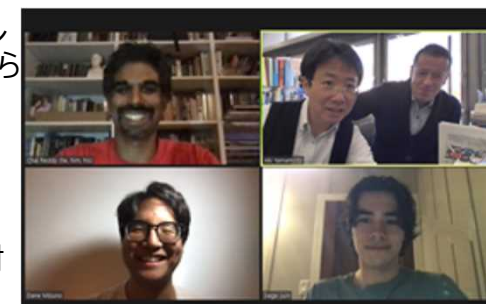
【プログラムの内容】

- テーマ：Mental Health(心の健康)
- 準備：各校ごとに代表3人が英語での学校紹介ビデオ作成ならびにMental Healthの各校の取組みのリサーチと自分たちができることの模索をする。オンライン・ワークショップは、第1回が慶應志木高の文化祭、第2回が学習院高等科の文化祭の中で行われた。
- 第1回オンライン・ワークショップ：慶應志木高が主幹になり、①三校の学校紹介ビデオ(英語)上映、②各校の取組みの概要を英語で説明。SGLI経験者の大学生もオンラインでハワイと横浜から参加。
- 第2回オンライン・ワークショップ：学習院高等科が主幹になり、①第1回のふりかえり、②各校のメンタルヘルスについての取組みを英語でプレゼンテーションし、オンラインによるハワイとサンフランシスコのゲストからコメントや質問をいただく。



【工夫した点】

- 第2回オンライン・ワークショップでは、ハワイとサンフランシスコをインターネットでつなぎ、SGLIの元事務局長やSGLI経験者二人にも参加していただき、コメントをいただいた。学習院高等科文化祭では感染対策を講じてオンラインと対面のハイブリッドで行った。



【今後の課題】

- 来年度もSGLIは中止になる可能性があり、参加予定校に声をかけてオンライン・ワークショップを計画する。

【経緯】

2012(平成24年)	学習院高等科がSGLIに参加を始める。以降、毎年参加
2020(令和2年)3月	SGLI2020中止の知らせを受けて、生徒、担当者で代替案を模索開始
同年10月23日と30日	オンライン・ワークショップ実施



Round Square加盟校との連携による取り組み【玉川学園高等学校】

玉川学園は、世界55か国220校以上の私立学校が加盟しているRound Squareという連盟のメンバー校です。各メンバー校には、Round Square実行委員会があり、日常的に国際教育に関わる様々な活動をしています。今回は、オーストラリアのメンバー校の委員の生徒たちと、お互いの日頃の活動についての報告と意見交換を行いました。

【プログラムの内容】以下の内容について意見交換をした。

- コロナ禍における学校生活について
- Round Square実行委員会としてどのような活動をしているか
- Round Squareの6つの理念(Internationalism, Democracy, Environmentalism, Adventure, Leadership, Service)について、どのような活動をしたか



【工夫した点】

授業ではなく委員会活動なので、お互いのお昼休みの時間を活用した。(日豪間の時差はほとんど無い)

【今後の課題】

- PC備え付けのカメラでは視野がとても狭いため、今後は広角のカメラを用意する。
- オンライン交流は、単発になりがちなので継続性をもたせていきたい。
- リアルタイムのオンライン交流では、時差の関係で実施ができる国に限られる。今後はリアルタイムではない形でのオンライン交流も検討していきたい。



【経緯】

2005年	玉川学園がRound Square に加盟 以後メンバー校と毎年約80名の生徒交換をしている。
2020年11月	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大のため、生徒の往来中止。オーストラリアのメンバー校とのオンライン交流

他機関との連携による取組み 【明法中学・高等学校】

SDG s 学習+カンボジアの子どもとLIVEボランティア

学校主催の夏期カンボジアボランティア研修が中止された代替として、ボランティアプラットフォームの協力の下、カンボジアの子どもたちへの教育ボランティア（外国語活動）を日本にいながらLIVEでできるプログラムを実施。日本語書き取り学習を赤ペン先生としてサポートしたり、日本語を使ってゲームや国際交流を行った。また、国連資料や独自の研修テキスト、臨場感のある動画教材を利用して、SDG s について学びを深めた。学習の最後には「SDG s 小論文コンテスト」で「私とSDG s と世界」を発表し、優秀者には特別賞を授与した。

【プログラムの内容】

研修	テーマ	毎週 土曜日
	イントロダクション	
第1回	SDGsの基礎について学ぼう①	6/27
第2回	SDGsの基礎について学ぼう②	
第3回	SDGsの基礎について学ぼう③	7/11
第4回	LIVE海外ボランティア実践①（カンボジア）	8/1
第5回	SDGsと世界と日本	
第6回	SDGsと私	
第7回	SDGs×ぼらぼら	
第8回	LIVE海外ボランティア実践②（カンボジア）	8/29
第9回	今からでも始められるSDGsアクション	
第10回	コロナとSDGs	
第11回	LIVE海外ボランティア実践③（カンボジア）	9/19
第12回	SDGs小論文の作成	9/26

赤ペン先生



振り返り活動

赤ペン先生



交流会の様子



和菓子を紹介

【経緯】

2018年 8月	カンボジアでのボランティア研修が夏期研修プログラムの一つとして開始。
2020年 6月	新型コロナウイルス感染症の影響により、2020年度のカンボジアボランティア研修の中止が決定。その後、ボランティアプラットフォームとの検討を重ね、オンラインによるLIVEボランティアの実施を決定。
2020年 8月	オンラインによるボランティア研修を実施。





オンライン英会話を利用した異文化理解交流 【安田学園中学校・高等学校英語科】

2019年4月より、オンライン英会話を利用した異文化理解交流を授業の一環として導入している。導入経緯は、文部科学省による4技能重視型の英語教育推進の通達があり、短期受入型の国際交流以外にも長期間にわたる交流を模索する中で、同じアジア圏で英語が通じるフィリピンとの交流が案として浮かび、オンライン英会話を導入する運びとなった。

【プログラムの内容】

対象学年は中学1年生から高校3年生までの6学年にまたがり、授業実施期間中の毎週1時間（実質35分間）実施。授業はクラス単位で実施され、毎回違う英会話講師（フィリピン人のネイティブスピーカー）と教科書をベースにしたトピックについて英語でコミュニケーションを取る。たとえば教科書の内容がFood Bankであった場合は、フィリピンと日本の食糧事情について英語で話し合うことになる。

【工夫した点】

導入にあたり最も気をつけた点は、単なる英会話のレッスンに終わらせることなく、お互いの文化や歴史について英語を介してコミュニケーションを図れるような教材の開発であった。この点では（株）Weblioと協力をして教材開発を進め、定期的に内容を吟味しながら本学園の生徒にあった教材を提供して頂いている。また、パソコン室にフィリピンを紹介した本を多数配置し、生徒が自ら興味をもって異文化交流にあたれるような環境整備を進めた。

【今後の課題】

現在はフィリピン一国のみの交流となっているが、将来的には多くの国籍のネイティブスピーカーとコミュニケーションが取れるようにしたいと思う。紛争当事国の人達とオンラインで意見をおうかがいし、一方的な報道だけではなく、多方面から異文化を理解できる生徒を育てられるようなプログラムを開発したいと考えている。

【経緯】

2016年4月	オンライン英会話の勉強会に参加し、導入にあたっての計画を策定
2018年4月	オンライン英会話導入のための英語科小委員会の発足
2019年4月	オンライン英会話（高校3年生を除く全学年）スタート
2020年4月	オンライン英会話を高校3年生でもスタート（安田が学園全生徒による実施へと移行）

2020東京オリンピックルーマニア代表選手との交流の取組み【聖徳学園中学・高等学校】

本校が所在する東京都武蔵野市がホストタウンとなるルーマニア代表選手とのオンライン交流をルーマニア大使館を通じてオンラインで実施した。以前より交流のある立命館大学学生がサポートに入り、英語を介して生徒からの質問を選手たちに答えてもらった。質問内容は事前に何度か立命館大学学生とオンラインで打ち合わせ、発音や文法などを修正した。

【プログラムの内容】

- ・ 東京オリンピックルーマニア代表選手団とのオンライン交流（60分程度）
- 事前に用意した質問を生徒から投げかけ、それに答えてもらう形で会を運営。
- 立命館大学学生が司会進行や英語コミュニケーションの補助を担当。

【工夫した点】

- ・ 高校生だけで英語の自由なコミュニケーションを行うことは困難であったため、以前より交流のあった立命館大学にお願いしグローバル教養学部の学生数名を派遣してもらった。
- ・ 事前に何度か高校生と大学生でオンラインでの打ち合わせを実施。英語の添削指導も学生から受けた。
- ・ 必ず全員が発言をすることで英語での発信力を高める機会とした。
- ・ オンラインでの交流は様々な不具合が発生する可能性が予想できたため、本校のICT担当にも会に参加してもらった。

【今後の課題】

- ・ 今回できた縁をどのように継続していくか。

【経緯】

2019年3月	在日ルーマニア大使館訪問。大使館職員へ「ルーマニアと日本の架け橋として自分ができること。」をテーマとしたプレゼンテーションを実施。
2020年5月	在日ルーマニア大使館に選手団との交流企画を打診、調整。立命館大学とも調整開始
2020年6月～7月	聖徳学園生徒、立命館大学学生とのオンライン打ち合わせ会の実施
2020年7月17日	ルーマニア選手団とのオンライン交流会



かながわ国際交流財団との連携による取組み【神奈川県立横浜国際高等学校】

緊急事態宣言による臨時休校中においても学びを止めず、生徒の学習機会を確保するために、Google Meetを用いた双方向のオンライン授業を行った。かながわ国際交流財団と連携し、ロックダウン下のネパールの状況や、日本における外国人留学生・外国人労働者の状況について学ぶ特別授業を、本校学校設定科目の「国際理解」の履修者を対象に実施した。困難な状況の中でどのように人権を守るかを考えた実践報告である。

【プログラムの内容】

- テーマ：コロナ禍で「外国人」に何が起きているのか。
- 前半：講師によるスライドを用いたプレゼンテーション
- 後半：生徒が講師に質問し、学びを深めるディスカッション

【工夫した点】

講師とGoogle Meetの通信確認や時差についての話し合い等、当日の授業までに何度かオンラインにて打ち合わせを行った。生徒が将来外国人として暮らすことになった場合にどのような困難に直面するかを想像し、現在日本における外国人に係る問題を学び、どのようなサポートが必要になるかを考えることが出来るよう工夫した。授業のふりかえりをGoogle Classroomで集約し、クラスメイトの学びを共有出来るようにしたことなど、ICTの活用は非常に効果的であった。



【今後の課題】

学んだこと自体に大きな意味はあるが、知り得た課題の解決に向けて行動するところまでは到達できていない。コロナ禍では難しいが、行動し学ぶことの意義を内省できるような体験を積めるように、日本在住の外国人との交流を行いたい。

【経緯】

2020年4月	かながわ国際交流財団とのオンライン特別授業を企画
2020年5月	本校の学校設定科目「国際理解」の受講生を中心に参加者を募集
2020年5月29日	オンライン特別授業を実施

海外の語学学校との連携による取組み【神奈川県立湘南高等学校】

世界で活躍する生徒を育成するために、オンラインを活用し、文化的背景の異なる他者との交流を通じて、他国及び自国についての理解を深め、視野を広げる異文化交流プログラムを2020年新規に企画した。10月に計3回の総合的な探究の時間を活用し、1学年360名を対象に実施した。

【プログラム内容】

- ・1日目（事前準備）：本校や自分たちに関する自己紹介動画の作成、先方への送信に加え、先方から送られてきた自己紹介動画及び質問リストの確認。
- ・2日目（1回目）：香港、タイ、ベトナム、カンボジア、モンゴル、スリランカ、フィジーの7か国の語学学校で学ぶ10代の学生と本校の各クラスがそれぞれZoomでつながり、相互の国の紹介と質疑応答。
- ・3日目（2回目）：前回と同じ国とつながり、新型コロナウイルスへの各国の対応の違いについて議論。

【工夫した点】

- ・事前に、動画や質問リストのやり取りを行うことで、円滑なコミュニケーションの下地を作る。
- ・2回同じ国と繋ぐことで、前回の反省点を改善できる機会を与え、継続的な成長を促す。
- ・双方が興味を持つトピックを選定し、活発な意見交換を可能とする。

【今後の課題】

- ・事前・事後にオンラインツールを活用した共同のプロジェクト等を進めるため、教員の監督下における本校の生徒と海外の学生のコミュニケーション体制を作ること。



【経緯】

2020（令和2）年4月	新型コロナウイルスの蔓延で海外渡航のプログラムが中止となったことを受け、グローバルに活躍できるリーダーの育成というスクールミッションを果たすために何ができるか検討を開始した。
同年8月～9月	交流先やプログラム内容について、仲介業者と実施の具体について検討した。
同年10月	オンラインを活用した異文化交流プログラム開始した。

他機関との連携による取組み【神奈川県立厚木高等学校】

公益財団法人AFS日本協会が主催するAFSアジア高校生架け橋プロジェクトの延期に伴う代替として、同協会の協力の下、Zoomを利用したオンライン国際交流を実施した。2020年10月7日に本校2学年2クラスの英語の授業を利用して、同プロジェクトで来日予定であったタイとカンボジアの高校生10名が参加した。各クラス1班4人に分かれ、お互いの国や学校について、スライドや画像を用いたプレゼンテーションや意見交換等、国際交流を図った。

【プログラムの内容】

テーマ：「両国の文化と学校生活」

時間：60分×2コマ

内容：1班（4名）×10名 1班につき1名の海外学生

1. 本校生徒代表からの学校生活に係るプレゼンテーション（全体）
2. 本校生徒からのプレゼンテーション（各班）
3. 留学予定者からのプレゼンテーション（各班）
4. 意見交換（各班）
5. 各班によるグループ活動のフィードバック（全体）
6. 本校生徒代表からの感想（全体）

【工夫した点】

- ・少人数制（2～4名）により全生徒が会話ができる環境を整えた。
- ・True or False Quizを用いたプレゼンテーションをすることにより、双方向の会話ができるよう配慮した。
- ・各クラスの会場を2つの教室に分け、ハウリングをしないよう工夫した。

【今後の課題】

- ・全てのクラスで行えたわけではないため、このような機会を増やしていきたい。
- ・より多くの教員と連携して学年単位で取り組んでいきたい。

【経緯】

2017(平成29)年4月	同協会からの留学生の受入れを開始
2020(令和2)年月上旬	同協会によるAFSアジア高校生架け橋プロジェクトにおける留学予定者の派遣を延期
2020(令和2)年10月	代替案であるオンライン国際交流会の実施・運営



海外の高校との連携による取組み【神奈川県立厚木高等学校】

スーパーサイエンスハイスクール事業で交流のある台湾のLinkou High School（以下、“Linkou”）（同校生徒29名が参加）と、Zoomを利用したオンライン国際交流会を実施した。2020年12月8日（放課後）及び22日（授業内）の2回にわたり行い、本校から1回目に17名、2回目に39名の本校生徒が参加した。7班に分かれ、両国の文化の違いについて、スライドや画像を用いたプレゼンテーションや意見交換等、国際交流を図った。

【プログラムの内容】

－ 1回目－

テーマ：「両国の食文化と観光地」

時間：40分程度

内容：

1. Linkou生徒からのプレゼンテーション（各班）
2. 本校生徒からのプレゼンテーション（各班）
3. 意見交換（アニメ・漫画や鉄道等）

－ 2回目－

テーマ：「両国の学校生活について」

時間：40分程度

内容：

1. 本校生徒代表から日本の正月に係るプレゼンテーション（全体）
2. Linkou生徒からのプレゼンテーション（各班）
3. 本校生徒からのプレゼンテーション（各班）
4. 意見交換（流行もの等）
5. Linkou生徒代表からの感想・フィードバック（全体）

【工夫した点】

- ・クイズ形式を用いたプレゼンテーションをすることにより、両校生徒が会話をできるよう配慮した。
- ・本校の全生徒が必ず発言できる課題設定とした。

【今後の課題】

- ・授業内での実施の場合、全ての生徒が双方の会話を行うことができる少人数によるグループ分けの導入
- ・電波・ネット速度に左右されないWIFI設備等のハード面の改善

【経緯】

2020(令和2)年10月	Linkouへの連絡・打診
2020(令和2)年11月	プログラム内容の企画・提案
2020(令和2)年12月	オンライン国際交流会の実施・運営



他機関との連携 による取組み【神奈川県 橘学苑高等学校】

学校主催の留学プログラム(ニュージーランドへ10ヵ月)が延期となったため、現地留学サポート会社(JTC)に業務委託契約を結び、週3回のオンライン授業を行っている。現地語学学校(Canterbury College)が講師を確保し、あらかじめ学校の教員と打ち合わせの上、内容を決めた。本来予定していた留学プログラムでの渡航先であるクライストチャーチ周辺を題材に、英会話の授業を進めている。期間は2021年1月～3月までと予定している。その他にも、外部講師を招いたラグビー体験講習や、本コース卒業生を講師とした“外国語講座”を行った。

【プログラムの内容】

- ・週3回、Zoomを用いてニュージーランドとのオンライン授業を行っている。
- ・そのうちの2回は現地語学学校とのオンライン英会話で、現地校のESOLの授業内容と同様、文法的な学習も含む。1コマ45分で日本人の教員もサポートに入るが、講師とのやりとりは全て英語で生徒主体で行う。
- ・残る1回は、現地留学サポート会社が“ニュージーランドの学校”“クライストチャーチの街並み”等の留学生生活を踏まえた現地情報を教わる機会を設けている。



【工夫した点】

- ・クラス18名を2グループに英語力のレベルで分け、発言の機会が増えるようにした。
- ・できるだけ現地の雰囲気が生徒に伝わるように、留学予定だったクライストチャーチを題材に英会話の場面を設定してもらった。



【今後の課題】

- ・4月以降のオンライン授業の継続については未定。
- ・現在のオンライン授業では、発言の機会が充分でないと感じている生徒も多く、個別のオンライン授業を設定できるかを検討する必要がある。

【経緯】

2020年9月	留学プログラムが予定どおり行えないことが判明。渡航時期の延期と共に、日本の学校に在籍する場合のカリキュラム検討が始まった。
2020年11月	学校の教員と現地留学サポート会社、現地語学学校の三者でオンライン会議。内容の討議を行った。
2021年1月	オンライン授業開始、ラグビー体験講習、外国語講座
2021年2月	ニュージーランドビザ申請が無期限の延期と発表があった。

他校との交流による取組み【神奈川県 公文国際学園高等学校】

昨年度、シドニーのKings高校の生徒がラグビーワールドカップ観戦ツアー期間を利用して本校に滞在し、生徒との交流プログラムを持つ。この交流が成功し、今年度、オーストラリアAOCより「the Australian Olympic Connect ともだち」準備プログラムに招待される。準備段階では日本とオーストラリアから選ばれた20校からスタートし、来年に向けて参加校を広げていく計画。

【プログラムの内容】

メルボルンのDarwin高校、St.Bernard's高校との交流。プラットフォーム「オリンピック」をベースとし、その理念やオリンピックがもたらす友情、思いやり、尊敬、絆等について話を進める。英語の授業の中、ZOOMを使用。オーストラリアの生徒たちは日本語のクラスの生徒で、2か国語を使ったやり取り。「ともだち」というタイトルを目指す、2国間の交流。

【工夫した点】

会話は英語と日本語を使用。ZOOMのグループ分けで少人数にし、会話をしやすくする。話題は学校生活から国内外の政治の話に及ぶ。最後に再会を誓って、交流を終える。

【今後の課題】

引き続きこのプログラムに関わり、プログラムの開発に協力する。会話の交流にとどまらず、さらなる発展を目指す。意欲的なオーストラリアの友人と共に、良き未来につながる新しいアイデアを考えていきたい。



【経緯】

2019年9月	シドニーのKings高校の生徒がラグビーワールドカップ観戦ツアーを利用して本校の寮に滞在。生徒との交流プログラムを持つ。
2020年	この交流の成功を受け、オーストラリアAOCより「the Australian Olympic Connect ともだち」準備プログラムに招待。
2021年	参加校との交流をひろげていく予定。



他機関との連携による取組み【神奈川県 鶴見大学附属高等学校】

コロナウイルス感染予防のため、休校中や分散登校中に行った企画で、本校の生徒とスペインの日本語学校で日本語を学んでいる学生とのオンライン交流会。本校旧教員がスペインの日本語学校で教壇に立っており、その関係で交流の申し入れがあったので実現した。日本語での交流会ではあるが、自己紹介や日本独自の物、食べ物や文化などをお互いに紹介しあった。特に在宅で参加した場合には、身の回りにある物、実物の提示を推奨して、話題の幅が広がった。漫画やアニメといったサブカルチャーの分野で、スペインの学生には高い関心が見られた。

【プログラムの内容】

<目的>

- ・同じ世界に生きる同世代の人たちと交流することで、大きな視野と心を養う。(グローバル教育)
- ・コロナ禍の今だからこそ、与えられたものをこなすのではなく、主体的に学ぶ。(探求型教育)
- ・今あるICTスキルや情報リテラシーを向上させ、自らが発信者となる。(ICT教育)

<実施内容>

- ・希望者を募って、Google Meet を利用したオンライン交流会。進行役として双方の教員が加わり、発言を促す。
- ・スペインの日本語学校生は「初級クラス」に在籍しているため、なるべくわかりやすい表現での交流を行う。



【工夫した点】

- ・全員集めて一斉指導からのスタートではなかった(休校・分散登校期間)ため、ICT機器を使いこなす技量の差が大きかった。
- ・日本語、スペイン語両方で進行できる人が欠かせない。

【今後の課題】

今のところまだ、この企画を継続するかどうかの見通しは立っていない。
継続するのであれば、事前指導が必要で、時差による実施時刻も検討の必要がある。



【経緯】

2020年3月	スペインに渡航した本校旧教員と、本校の教員が連絡を取る。
2020年4月	「コロナ禍の今だからこそ、できることをやろう！国境を越えよう！」スペインの学生と本校生徒の交流アイデアが生まれる。
2020年5月	本校のグローバル教育研究グループを中心に検討をし、実施内容を固める。参加希望の生徒を募集する。
2020年5月～8月	本校の中学生を含めて、計13回のオンライン交流を行う。

他機関との連携による取組み 【山梨県北杜市立甲陵高等学校】

本校SSHの人間力向上・国際交流プログラムの一環として、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センターによる文部科学省委託事業「令和2年度初等中等教職員国際交流事業」に参画し、インド連邦政府人的資源開発省およびインド環境教育センターの協力のもと、本校生徒および本校教員とインド教職員の交流をZOOMで実施した。理系への興味・関心を深めるとともに外国人とのコミュニケーションを通して、その国の風俗・習慣や伝統・文化に親しみ、国際交流に積極的に取り組む態度を養うことをもってユニバーサルな科学技術系人材の育成を期すことを目標として実施した。

【プログラムの内容】

《教員対象》インド教職員交流プログラム

① 実施方法

- ・インド教職員16名と本校教職員16名を、各3グループに分けて実施した。
- ・インド教職員は、後日の生徒対象のプログラムの授業担当者であり、生徒情報についても共有した。
- ・同時通訳者を入れ、正確な情報交換を行った。

- ##### ② 討議テーマ：「探究活動の取組み」、「大学受験、進路指導、キャリア形成」、「SNS上のいじめ、誹謗中傷の現状と課題」

《生徒対象》インド教職員交流プログラム

① 実施方法

- ・参加者：1,2年生全員（240名）
- ・上記教員対象プログラムに参加したインド教職員16名に、本校1,2学年の全8教室のいずれか2教室で45分授業を1回ずつ実施していただく形式とした。
- ・生徒の英語力の向上を期すため、通訳無しで実施した。

② 授業内容

- ・前半：インド教職員各々の専門分野および学校の様子、インドの国内情勢等。
- ・後半：質疑応答

【工夫した点】

当初予定の来校・対面交流が中止となり、WEB授業に切り換えた。本校および本校が所在する北杜市の紹介ビデオを作成した。(本校HPに掲載中)

【今後の課題】

今後いかにしてSSH科学研修旅行の訪問先やその他のSSH活動につなげ、連携・交流を深化させていくかが課題である。



【経緯】

平成25年度～	SSH科学研修旅行にて、インド共和国訪問を開始。以降、コロナで中止となるまで毎年訪問していた。
令和元年11月	公益財団法人ユネスコアジア文化センター（ACCU）「海外教職員の受入れについて」にて、海外教職員の受入れ希望に関する照会があった。
令和元年12月～	本校からインド教職員受入れ希望調書を提出、決定通知、実施準備。
令和2年11月	交流プログラム実施

他機関との連携による取組み【長野清泉女学院高等学校】

社会福祉部10名の活動として、マラウイのコーヒーを通じて国際的な支援事業について理解を深める学習を実施。このコーヒーから得られる収益は全額マラウイの子どもたちの給食費となる。マラウイの現状を学びつつ、今後コーヒーを広く知ってもらい取り組みを進めている。2020（令和2）年12月から2021（令和3）年6月にかけて4回にわたって、日本でコーヒーを取り扱っているNPO団体やその現地関連団体とオンラインビデオ会議ツールを用いて、学習と交流の機会を設ける。

【プログラムの内容】

- ・ NPO団体せいぼじやぱんの職員とのオンライン勉強会（2020年12月開始）
1回目、マラウイの現状や日本との関係、また現地での給食支援活動について。2回目、マラウイにおけるコーヒー豆の生産過程や味の特徴について。
- ・ 自校教職員への周知活動（2021年2月）
勉強会で学んだことをまとめて、教職員にそのプリントとマラウイのドリップ式コーヒーをプレゼントする。
[今後の予定]（2021年5月～7月）
- ・ オンライン勉強会 3回目
（コーヒー豆の生産の現場で働いている方々の労働環境や仕事に対する考え方について）
- ・ オンライン交流
（マラウイの方々とオンラインで触れ合い、マラウイの文化について知る。）
- ・ 文化祭での周知活動
（来校者にコーヒーを販売。学習成果を展示。多くの方々にマラウイのコーヒーを知ってもらう機会とする。）

【工夫した点】

- ・ 国際交流でありながら奉仕活動であり、マラウイの子どもたちの支援を目的とすることを意識した。
- ・ 生徒たちが学習しながらコーヒーに愛着を持ち、この事業に賛同してもらえる人を増やす活動となるように心がけた。

【今後の課題】

- ・ 今回の一連のオンライン交流プログラムの後も、継続的にマラウイと関わりながら、人を介する形でコーヒーと給食支援事業の認知を広め、社会福祉活動を続けられるようにする。

【経緯】

2020年6月～11月	新型コロナウイルス感染症の影響により、校外でのボランティア活動が中止。
2020年12月～	オンラインによる交流開始



オンライン勉強会の様子



オンライン勉強会の講師とマラウイコーヒー



他機関との連携による取り組み【岐阜県立可児高等学校】

岐阜県ふるさと教育の一環として、令和元年度から県の地域共創フラグシップハイスクール事業で指定を受ける。初年度は、本校が所在する可児市の地域課題の一つである多文化共生をテーマにフィリピン・セブ島で来日予定の技能実習生が日本語を学ぶ日本語学校等を訪問した。本年度は、そのフィールドをベトナムに変え、地域の介護事業所でベトナム人技能実習生が活躍している実態について学び、渡航を計画していたが、コロナ禍で渡航を断念し、株）留学ジャーナルとオンラインによるベトナム人大学生との国際交流・ワークショップを企画した。

【プログラムの内容】12月26日～29日、1月1日、1月2日、1月3日の各日2時間で本校生徒23名が参加。

- ・一日目：バディとの英語での自己紹介、プレゼンテーションの実演、アイスブレイキング活動。
- ・二日目：ベトナムの日常の生活や、旧正月の風習などについてバディが英語でプレゼンテーションを行い、質疑応答。
- ・三日目：ベトナム料理の調理を実演しながら異文化理解。
- ・四日目：シンガポール大学卒のベトナム実業家から国際リーダーシップについての講義。
- ・五日目：コーディネーターからの英語プレゼンテーションについての実演及びTipsについて講義。
- ・六日目：グループプレゼンテーション及び閉校式。



【工夫した点】

- ・ワークショップはZoomブレイクアウトルームを活用した。日程外はスタッフ・教員の指導の下でLineによる生徒とバディとのやり取りで英語使用の機会を確保した。Lineグループを使用し、冬季休業期間中の課題に取り組みつつ、バディとの深い交流ができた。

【今後の課題】

- ・本取り組みは、地域共創フラグシップハイスクール事業の一環として本校探究学習を進める「エンリッチプログラムコアメンバー」を中心とした有志の活動であった。今後は、開催時期について検討するなどして、より多くの参加者を募る、または学校全体の活動として位置付けると、コロナ禍下であってもより多くの生徒に国際交流の機会の保証に資すると思われる。

【経緯】

2017年（平成29年）	NPO法人縁塾とともに夏のオープンエンリッチ2017を実施、地域課題解決型総合学習をスタートさせる。
2020年（令和2年度）	岐阜県教育委員会から地域共創フラグシップハイスクール事業の指定を受け、既存の活動他、海外フィールドワークを実施。
2020年（令和3年度）	本事業（海外フィールドワーク代替事業）及び、米NPO Kizuna Across Culture主催Global Classmatesに参加。
同年8月	現地訪問によるフィールドワーク断念、オンラインによる実施を株）留学ジャーナルと検討開始。
同年10月	募集開始。
同年12月	Zoomによるワークショップ実施。

本校ALTとその家族の協力による取組み【静岡県立浜松湖南高等学校】

1年生英語科生徒が毎年行っているサマーセミナーに県内ALTを招聘できなかったこと、例年行っている近隣の南米系外国人学校の生徒たちとの交流ができなかったこと、ロンドンにある姉妹校との相互交流ができなくなったことなどから、その代替となる国際交流体験として、Zoomによる交流を実施した。2021年1月25日及び2月1日の「異文化理解」の授業時間に、生徒20人ずつが、本校ALT Sam Foster氏の姉であるJessica Foster氏（アメリカモンタナ州在住）との交流を行った。

【工夫した点】

- ・限られた時間内で効率よく交流できるよう、生徒たちには事前にペアを組ませ、質問を準備させておいた。
- ・質問の内容は、アメリカの生活の様子やJessicaさんの考えを聞くようなものにするよう指導した。
- ・「冷蔵庫の中や地下室を見せてもらいたい」といった要望があったため、事前にALTから連絡を入れてもらい、準備をお願いしておいた。

【今後の課題】

- ・海外の同世代の人たちと、より社会的な問題について議論ができるような機会を設けたい。
- ・普通科、他学年でも同様の機会を設けられるとよい。



【経緯】

2020（令和2）年7月	新型コロナの影響により、サマーセミナーへの県内ALTの派遣が中止になる。
2021（令和3）年1月	イギリスロンドンにある姉妹校とのオンライン交流を企画したが、相手校がコロナによる学校閉鎖となり、中止になる。
2021（令和3）年1月	本校ALTに相談。Jessica Foster氏とのオンライン交流が可能な時間とやり方を検討。
2021（令和3）年1～2月	オンラインによる交流の実施

他機関との連携による取組【三重県 三重高等学校】

コロナウイルスの世界的蔓延により、短期・長期の留学生受け入れと交流が中止になりました。そこで、国際交流基金・日中交流センターの「日中高校生対話・協働事業」に参加し、本校は「Global Link 2020」と名づけたプロジェクトを始めました。2020年11月より中国河南省洛陽市にある洛陽外国語学校、北京外国語大学附属外国語学校との交流を始めました。1・2年生16名が相手校それぞれの日本語を専攻している生徒たちと日常生活や習慣、学校行事などを話題にしてオンラインで交流をしました。

【プログラムの内容】

- ・「Global Link 2020」活動の1つとして、週に1度、放課後を利用して60～90分程度の交流会を開催しました。活発な会話を期待して、柔軟な計画を設定しました。高校生らしい日常生活や学習内容などが話題の中心となり、国家体制が大きく違うにも関わらず、若者の日常や関心事は多くが共通していることが分かりました。



【工夫した点】

- ・参加生徒を2つの学年から募集し、活動を来年度に引き継ぐことができたようにした。
- ・参加人数を相手校と相談し、おおよそ同じ人数で活動できるようにした。
- ・呼んでほしい自分の名前を振り仮名付きで名札に書き、親しみが持てるようにした。
- ・できるだけ多くの生徒が参加できるように3名程度のグループを作り、グループごとに交流できるように工夫した。
- ・継続して話ができるように同じグループどうしで対話を重ねた。
- ・明瞭な音声で交流できるようにグループごとにマイクなどの機器を用意した。



【今後の課題】

- ・10年ほど前から中国の学校と国際交流活動を実施しており、生徒たちは慣れていたので、交流の開始にあたっての障がいはいなかったが、交流時間が短くテーマを深く掘り下げることができなかつた。できれば直接会って対話を重ねたい。



【経緯】

2020年(令和2年)9月	国際交流基金 日中交流センターに企画書を提出
2020年(令和2年)10月	中国側交流学校との調整完了
2020年(令和2年)11月	オンライン交流会開始

海外の高校との連携による取り組み 【追手門学院中学校】

一般財団法人ジャパンアートマイルが主催する、アートマイルプロジェクトに参加。毎年テーマを元に交流校と共同して壁画を作成するプロジェクトであり、今年はコロナと共に生活することをテーマにインドのクライスト・ナガール上級中等学校との交流を実施。実行委員を軸に、中学1年生67名全員が参加し世界へのメッセージとなる壁画を作成した。

【工夫した点】

- ・67名全員のグローバル意識を養うため、事前学習は全員で行い、誰も置き去りにならないよう周囲を巻き込みながら進めた。

【今後の課題】

- ・事前学習の前に文化交流を行い、打ち解けた後に学習に移る方がスムーズであったように思う。
- ・入学したての1年生から実行委員を募ることなど、スケジューリングが難しかった。

【経緯】

2020年6月	交流校（クライスト・ナガール上級中等学校）決定
2020年7月	両校ともに自己紹介動画を共有
2020年7月・8月	当校教員によるSDGs共同事前学習（日本：オフライン／インド：オンライン）
2020年9月	ZOOMでの初交流
2020年10月	COVID-19についての事前学習・意見交換会
2020年11月	文化交流会（歌・ダンスなど）
2020年12月	壁画デザイン打ち合わせ。末頃に当校側を完成させ、インドへ発送。



他機関との連携による取組み【大阪府立富田林高等学校】

令和2年10月～12月にかけて、中国広州外国語学校の生徒と、Web会議システムを活用し、オンラインによる共同研究を行った。身近なSDGs達成に向け、タブレットPCを用いて、グループごとにデータの共有や意見交換などを行った。Human Development専門コース生40名がこの取組みに参加し、英語力の向上のみならず、国際的志向性や英語でコミュニケーションを図る意欲の向上を図った。

【プログラムの内容】

- ・第1回交流（10月上旬）：学校紹介
- ・第2回交流（10月下旬）：グループごとに自己紹介
- ・第3回交流（11月上旬）：グループトピックについて、調査内容の紹介＆質疑応答
- ・第4回交流（11月下旬）：プレゼンテーション（両国の調査内容の発表＆質疑応答）
- ・第5回交流（12月中旬）：グループディスカッション（前回のプレゼンを受けて、解決策について意見交換）
- ・第6回交流（12月下旬）：最終プレゼンテーション（自国について、両国の違いについて、解決策の提言）



【工夫した点】

- ・トピックごとに4人グループを作り、日本と中国が同じトピックについて研究をすることで、両国の違いについて意見交換できる機会を作った。
- ・日本と中国でワークシートを共有し、事前の調べ学習に活用した。



【今後の課題】

- ・今年度は、プレゼンテーションの事前準備の時間確保に苦慮したため、次年度以降はよりスムーズに共同研究を実施できるよう企画していく。

【経緯】

2020年3月以降	予定していた海外修学旅行が中止となる
2020年7月	海外の学校とのオンライン交流の検討を開始
2020年8月	中国広州外国語学校とのオンライン交流について協議開始
2020年10月	交流開始



他機関との連携による取組み【兵庫県立川西明峰高等学校】

ESD(Education for Sustainable Development : 持続可能な開発のための教育)を学校全体で実現すべく、交流先は国籍や年齢を問わず、対面とオンラインの双方での国際交流を定期的に行っている。アメリカ私立学校とのGlobal Classmatesでは、「総合的な探究の時間」で7か月間毎週1回オンライン交流を実施した。両校の教員が交代で2週間に1回ディスカッショントピックを立ち上げ、両校の生徒は、適宜動画や写真を用い英語と日本語の2言語で掲示板形式で交流を行った。

【プログラムの内容】

- ・米国非営利法人 Kizuna Across Cultures が提供するオンラインプログラム Global Classmates を活用。
- ・本校1年生17名を対象に実施した。交流相手は日本語履修者であった。
- ・両校の生徒にとって親しみやすいディスカッショントピックを設定した。
例: 学校生活、かばんの中身、今流行っていること、ホリデー等
- ・Schoology(右の図参照)を、アプリとして生徒のスマートフォンにダウンロードすることで、授業外でも交流を実現した。
- ・交流場所はSchoologyのみとし、両校教員・生徒に加えて、コーディネーターとGlobal Classmates経験者が交流の活性化に向けて支援を行った。
- ・以下、交流参加生徒の感想一部抜粋。
「毎週海外と交流することは初めてで、楽しかった。」
「『おせち』などを自分が知っている単語だけで伝えることは楽しかった。」



【工夫した点】

- ・オンライン交流をカリキュラムとして位置付けることで、適切な教員数・ICT環境の確保、長期間での実施、生徒の学びの深化を実現。
- ・授業内で事前・事後学習を行い、事後は記述でのリフレクションで「学びに向かう力・人間性」を育む評価(形成・総括)を実施。
- ・校内では学年集会での生徒による発表、校外へは公式BlogやHPをとおして活動内容や生徒の感想を発信。
- ・対面での国際交流は全学年での学校行事として、オンラインでは学年や類型ごとの授業単位で実施。
- ・2年生からは複数の(対面交流含む)交流先と連絡をとりあい、ICTを用いた探究学習の調査を適宜実施。
- ・交流先の時差を考慮して交流手段を決定(令和2年度のオンラインでの交流は右下の表)。生徒の様々なICT活用能力が向上。

【今後の課題】

- ・複数の交流先との協働によるカリキュラム開発



【経緯】

2020(令和2)年 1~3月	交流先と連絡をとりあい、年間行事予定・授業シラバスの原案を作成。
同年6月	Global Classmates 採択決定通知受領。
同年8月末 ~ 2021年2月	Global Classmates 実施。

交流先	つながり	交流手段	頻度	交流相手
アメリカ	Global Classmates (NPO KAC)	Schoology	7か月間	高校生
オーストラリア	姉妹校(隔年で受入・派遣実施)	Google Classroom	適宜	高校生
インドネシア	特別非常勤講師	Zoom	年1回1時間	大学・高校生
台湾	公益財団法人 兵庫県国際交流協会	Google Meet	年1回2時間	高校生

高校生による国際フォーラムの取組【和歌山県・和歌山県教育委員会】

第6回となる「アジア・オセアニア高校生フォーラム」について、中止も検討したが、代替案としてオンライン開催を生徒に打診したところ、「ぜひ参加したい」という多くの声が寄せられ、実施を決定。令和2年7月29日～同月31日、日本から生徒44名（県内39名、県外5名）、アジア・オセアニア地域から生徒18名が参加し、「津波・防災」「教育」「環境」「食糧問題」等、世界が共通で抱える諸問題について、すべて英語で議論を行った。

【プログラムの内容】

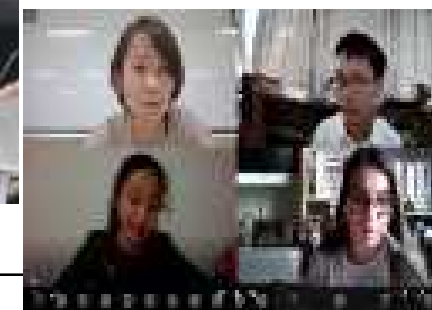
- ・各テーマについて、発表者がパワーポイントを用いてプレゼンテーション。
- ・発表で提起された問題等についてディスカッション。
- ・最終日に、発表者が、フォーラムを通して学んだことについてスピーチ。同スピーチは和歌山県ホームページで公開。

【工夫した点】

- ・詳細なマニュアルを作成するとともに、事前接続テストを行い、本番での機器トラブルを最小限に抑えた。
- ・毎日、フォーラム後に、「生徒交流」の時間を設け、生徒は自由に会話を楽しんだ。

【今後の課題】

- ・生徒は最終日により緊張がほぐれた様子であった。対面で行うと、世界遺産研修ツアー（高野山訪問）等の交流で、すぐに打ち解けるが、オンラインでは、アイスブレイクを工夫する等、より丁寧に生徒の交流をサポートする必要がある。



【経緯】

平成27年11月	第1回アジア・オセアニア高校生フォーラム開催
令和2年4月	第6回アジア・オセアニア高校生フォーラムの開催方法をオンラインに変更
同年4月～7月	要項（オンライン版）の作成、マニュアルの作成、接続テストの実施等
同年7月	第6回アジア・オセアニア高校生フォーラム（オンライン版）実施

他機関との連携による取組み 【りら創造芸術高等学校】

地域住民と学校が協働し、2009年から開催されている国際交流の祭典である【世界民族祭】が、今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、野外ブースで行う祭典ではなく、オンライン上での開催となった。そこで、JICA関西と協働し、日本に滞在している計8カ国の長期研修生と高校生が、『世界一周の課外授業』という交流企画内でビデオ会議ツールを用いてセッションを実施。その様子を収録した映像を編集し、配信を実施。

【プログラムの内容】

『世界を学びで結ぶ～世界一周の課外授業～』

参加国：フィリピン、ラオス、バングラデシュ、インド、ネパール、キルギス、ガーナ、モザンビーク

- ・日本に長期滞在をしている上記8カ国のJICA研修員1～2名が先生役として登場し、高校生4～5名に自国についての紹介や、質疑応答のセッションを行う。

【工夫した点】

- ・リアルタイムで交流の様子を配信するのではなく、事前に収録したものを多くの視聴者により分かりやすく伝えるために、日本語字幕や注釈等を挿入した映像を再編集し、配信した。
- ・各国のセッションを小グループで行うことにより、参加生徒全員が英語で発言する機会を設けた。

【今後の課題】

- ・日本語字幕だけでなく、英語字幕をつけることで、日本人だけでなく、世界中の人々に配信を視聴してもらえるようにする。
- ・一過性の取組としないため、配信映像をアーカイブ化し、世界民族祭Youtubeチャンネル内で公開を行い、継続して多くの人に視聴してもらえるようにする。

【経緯】

2009年11月	地域住民と協力し、第1回世界民族祭in紀美野を開催以降、毎年開催
2020年7月	新型コロナウイルス感染症の影響により、イベントを完全オンライン化することを決定
2020年10～11月	ビデオ会議ツールを用いて収録を実施
2020年12月13日	世界民族祭2020 オンライン配信



他機関との連携による取組み【島根県津和野高等学校】

Na Takallamというプログラムを活用し、今世紀最大の難民が発生している出身国であるシリアの方とビデオ会議ツールを用いての対話の機会を、総合学習・総合探究の時間の中で設けた。「難民」と呼ばれる人々が、今まで私たちと同様の普通の生活をしてきた人間であること、彼らが経験したことや直面している現状について理解し、身近な問題として捉えることができるようになること。そして、難民としての暮らしを知る中で、これからの日本の課題となるであろう多文化共生についても考える機会をつくることを目的とする授業実践である。

【プログラムの内容】

1年の総合的な学習の時間 プリコラージュゼミの選択講座の1つ

3時間程度で実施 受講者6名

事前授業→『アレッポ最後の男たち』を鑑賞

①クイズ：「シリアはどこ？」「故郷を追われた人は世界に何人？」

②「難民」のイメージを言語化

③難民の定義説明(移民との違い)

④シリア難民の統計(数・受入国と受け入れ人数)

⑤なぜ決死でヨーロッパに渡ろうとするのか(TED)

⑥内戦前のシリア(Youtubeより旅行動画)

⑦スカイプセッション(28歳女性トルコ在住)

⑧「難民」のイメージの再言語化&スカイプ前と比較。

⑨日本の難民認定制度について(認定率や制度についての簡単な説明)



【工夫した点】

・相手国によってはインターネットの接続が悪い場合があるので、インターネット接続に注意をした。

・国によっては時間の捉え方が異なるため開始時間を守ってくれない場合もあるので、有料のプログラムだとより信用できる。また、本講座では万が一に備え、オンラインセッションの前後のスケジュールに余裕を持たせました。

【今後の課題】

継続性(多様な国際プログラムについての知識があり、また何かしらの問題意識と目的を持っている人材の確保あるいは育成、ファンドレイズ)が課題

【経緯】

この講座を担当した、町営塾HAN-KOH講師が下記のようなキャリアを積んだことでこの講座の実施が実現した。

2013年2月	世界各国から参加する120人の女性と中東を自転車で行くFollow the Womenに参加
2019年	日本難民支援協会が実施する『難民アシスタント養成講座』に参加

他機関との連携による取組み【山口県 サビエル高等学校】

本校には文科省補助事業としてAFSが実施する「アジア高校生架け橋プロジェクト」で来日した生徒が留学しているが、彼女たちの来日は年度初めの予定から約半年間延期された。そこで来日前から交流を深めるため、AFS主催のオンラインミーティングを活用し、生徒による学校の紹介やお互いの国紹介などのセッションを実施した。セッションは2020年8月～11月不定期に計5回実施、AFSスタッフがファシリテーターとなり、本校生徒のべ54人と今年度来日した留学生5か国6名、前年度までに同プロジェクトで留学していた6名が参加した。

【プログラムの内容】

- 各セッションは約60分間とし、AFSスタッフの進行によって生徒によるプレゼンテーション・質疑応答・情報交換などを行った。
- 事前のプレゼンテーション準備として、意見交換をしながら生徒自身でスライドや原稿を作成した。使用言語は英語。
- 各セッションのテーマ：①サビエル高校の紹介、②サビエル寮の紹介、③留学生による各国紹介と生徒によるWelcome Speech、④⑤生徒によるサビエル高校の新しい生活様式紹介とASFスタッフによる日本の食事マナーの紹介。



【工夫した点】

- 過去2年間に同プロジェクトで本校に留学していた生徒にも参加を呼びかけ、交流の場を広げた。
- 留学生の来日前の不安を減らし、本校生徒が留学生の受け入れを実感できるよう、生徒の意見も聞きながらセッション内容の改善を重ねた。
- 生徒同士の交流が深まるよう、質疑応答の時間を積極的に設けた。



【今後の課題】

- 自宅等でオンラインセッションに参加する生徒への支援。
- 次年度以降の来日前オンラインセッションの実施を企画。

【経緯】

2019年	AFSと「アジア高校生架け橋プロジェクト」による留学生を受け入れることに合意。
2020年3月	新型コロナウイルス感染症の影響により、同プロジェクトの留学生来日の延期決定。
同年6月	AFSよりビデオ会議ツールを活用したオンラインでの留学生との交流が提案され、参加決定。参加生徒の募集開始。
同年8月～11月	オンラインセッション実施



他機関との連携による取組み 【徳島県立城ノ内高等学校】

日米の高校生のためのバイリンガル・バーチャル交流プログラム「2020年度Global Classmates(グローバル・クラスメート)」に本校が選抜され、令和2年8月から令和3年2月までの約半年間、高校2年生43名がアメリカ・ロサンゼルスのアルハンブラ高校とオンラインでの交流に参加した。交流内容は、2週間ごとにテーマを変えながら、写真や動画を活用しながら日本語と英語での意見交換を実施した。コロナ禍であったが、文化の違いを直接体感する異文化交流や日本語と英語の表現の違いを感じる等の言語学習を効果的に行うことができた。

【プログラムの内容】

毎週1回CALL教室でのメッセージ交流だけでなく、放課後や休日にも自分のスマートフォン等で継続的に交流を続けた。テーマは、2週間ごとに変更した。例えば、「学校紹介」、「放課後の過ごし方」、「流行のアニメやゲーム」、「地域のコロナ対応の様子」、「SNS等を含めた高校生間のトレンドのシェア」等について、写真や言葉でのメッセージ交換を行った。日本とアメリカ（ロサンゼルス）の生活等の『類似点』と『相違点』を体感しながら異文化理解を図り、自己成長につなげることを目標として活動を展開した。

【工夫した点】

- ・週に1回の定期的な交流時間の確保
- ・放課後や休日にも継続的に交流できるよう保護者へ協力依頼
- ・2週間ごとにタイムリーな交流テーマの提供
- ・アルハンブラ高校と現地コーディネーターとの緊密な連携

【今後の課題】

- ・事後指導、活動フィードバックの時間の確保
- ・自宅にWiFi環境のない、またはコンピュータのない生徒への支援



【経緯】

2020年（令和2年）2月	Global Classmatesに応募
2020年（令和2年）3月	Global Classmates選考のための電話面談
2020年（令和2年）6月	Global Classmates選考結果（合格）内定
2020年（令和2年）8月	パートナー校であるアルハンブラ高校とプロジェクトの進め方等についてオンライン会議

アジア高校生架け橋プロジェクト留学生との事前交流 【徳島県立徳島北高等学校】

本校では、令和2年12月から令和3年3月までの予定で、 Bangladesh 並びにフィリピンの2カ国から各1名ずつのアジア高校生架け橋プロジェクト留学生の受け入れを行っている。留学生が円滑に学校生活を送ることができるよう、来日の約1ヶ月前に、オンライン会議システムを用いて、本校生徒との事前交流会を実施した。

【プログラムの内容】

- Bangladesh からの留学生を受け入れる2年生の1クラス40名と、フィリンからの留学生を受け入れる1年生の1クラス40名の生徒が参加した。
- オンライン会議システム「zoom」で現地にいる留学生と接続し、全員が交替で留学生と会話した。

【工夫した点】

- スムーズに交流会が進むよう、各生徒が事前に質問事項を準備した。
- 生徒の代表が、生徒用タブレットで校舎内の様子を映しながら案内する様子を留学生にリアルタイムで配信した。

【今後の課題】

- 今後も留学生受入れの際には事前学習としてオンライン交流を実施したいが、対象を留学生個人から留学生の在籍校とするなど、広がりや継続性のある活動を検討する。

【経緯】

2020(令和2)年9月～	アジア高校生架け橋プロジェクト生の受入予定日の決定 AFS担当者及び本人との日程調整(複数回) 留学生と本校生徒とのメールでのやりとり
同年11月	オンラインによる事前交流会の実施
同年12月1日	留学生受入れ開始



他機関との連携による取組み【愛媛県立松山東高等学校】

新型コロナウイルス感染症の影響により、学校主催のフィールドワーク（フィリピン・台湾・中国）が中止となったため、訪問を予定していた学校・企業等と連絡を取り、オンラインでの交流を実施した。フィリピン（2年生8名）・台湾（1年生8名）・中国（1年生8名）のいずれにおいても、訪問を予定していた場所を仮想訪問し、直接の対面を予定していた人とも交流することができた。学校主催の短期語学研修（オーストラリア）も中止となったため、語学研修を行う予定であった語学学校（大学に併設）とオンライン授業を計画し、3月に実施を予定している。

【プログラムの内容】

- ・フィールドワークで訪問予定の学校との交流では、お互いの自己紹介・学校紹介、自国の紹介（クイズ・ディスカッション）、質疑応答を行った。
- ・短期語学研修では、英語学習と文化体験を取り入れた5日間のプログラムを作成した。

【工夫した点】

- ・訪問予定であった学校の責任者とよく連絡を取り、事前に何について話し合うかを決めて生徒に準備させた。質問事項などは事前に送付しておいた。
- ・オンライン交流実施後も、生徒が書いた手紙を送付するなど、息の長い交流が続くよう工夫した。

【今後の課題】

- ・学んだことや感じたことを、他の生徒に伝えるという広がりがない。



【経緯】

2014（平成26）年～	SGH事業の一環として、フィリピン、台湾など、海外へのフィールドワークを開始。
2020（令和2）年6月	海外フィールドワークの実施を、10月（中国・フィリピン）12月（台湾）に延期することを決定。
2020（令和2）年9月	海外フィールドワークの中止を決定。オンラインでの訪問・交流を検討。

元アジア架け橋留学生との取組み【愛媛県 中村学園女子高等学校】

平成30年度から始まった国際交流事業「アジア高校生架け橋プロジェクト」の留学生をこれまでに13ヶ国23名受け入れてきた。今回は令和2年度1年生36名を対象とした教科横断型の探究科目「GI（グローバル・イノベーター）探究」において、母国に戻った留学生へのインタビューをグループで行い、アジア諸国の現状を知るとともに、それらの国で解決すべき喫緊の課題についての解決策を考え、提案・発表するという内容でのPBLを実施した。（約10時間）

【プログラムの内容】

- ・全体テーマ：「アジア諸国が抱える諸問題について考えよう」
- ・事前学習： アジアについて学ぶ ①アジア各国の学習（地理・歴史・文化・食・宗教など）、
②外国人教員による出身国プレゼンテーション、③担当国をグループで調べて発表
- ・オンラインセッション：担当国の元留学生にZOOMで英語インタビュー（SDGs諸課題など）
- ・発表：インタビューをまとめ、グループごとに担当国の諸問題とその解決策を英語で発表

【工夫した点】

- ・留学生として本校に在学中から、この取組みについて生徒及び出身校と事前の打ち合わせを行っておくことで円滑な実施ができた。
- ・夏期休暇中に各グループで定期的にZOOMによるミーティングを行い、準備を進めた。
- ・探究科目の授業以外と活動をリンクさせ、効率的にプログラムを進めた。今回は英語表現で英語プレゼンテーション法、情報でプレゼンテーションソフトの効果的な活用法について扱った。

【今後の課題】

- ・元留学生とのネットワークを維持・継続するとともに、彼女たちに関わる学校や地域の人々も巻きこんだ探究的な取組みに発展・応用できるかどうかの検討を進める。

【経緯】

2018(平成30)年8月	「アジア高校生架け橋プロジェクト」留学生の受入開始（初年度：6名、2年目：10名、3年目：7名）
2020(令和2)年7月	生徒へプログラム概要の説明。元留学生との日程調整開始。
同年7月	グループが担当する元留学生の出身国のSDGsに関わる諸課題についてインタビューを行い、各国の情報収集と意見交換をZOOMで実施。1グループに1名の元留学生がつく。
同年9月	テーマに基づきグループが担当する国の現状と諸問題を提示し、その解決策を英語で発表。6ヶ国6名の元留学生とZOOMを介しライブ配信することで、質問や意見、助言をもらう。 ※8月に活動の途中経過報告のための中間発表会を実施



他機関との連携による取組み【株式会社With The Worldおよび特定非営利活動法人LOOB JAPAN】

「オンラインスタディツアー-inフィリピン」というタイトルの2時間30分の1日終了型のプログラムです。フィリピンの同世代の子ども達との交流を通して「幸せや豊かさとは何か」をメインテーマとしてディスカッションを行います。最少催行人員は20名。生徒1人につき4,400円自己負担。本校生徒は57名参加。

【プログラムの内容】

現地で撮影された映像を見て、都市部と地方との地域格差があることを知る。ゴミ山の隣で生活している同年代の子ども達のインタビューや現地の人々の暮らしの様子を見ながら、メインテーマに沿ってディスカッションをしていく。各グループには日本人大学生(インターン)が1名ずつ入り、英語が苦手な生徒のサポートをする。

詳細は、With The Worldさんにお問い合わせをお願い致します。

【工夫した点】

校内説明会での生徒へのプログラム内容や目的のおろし方。英語が苦手だからと敬遠する生徒がいるので、今回のような「英語を話すこと」がメインの目的ではないプログラムでは、どのような生徒をターゲットに案内をかけるかの工夫が必要。

【今後の課題】

ディスカッションという形を本来の意味で実現させるために、事前研修で学んだことを本番で活かすことができ、より学びを深いものにしていく前準備をすること。



【経緯】

2020/10/6	With The World担当者様より、内容に関するプレゼンを受ける
2020/12	生徒へ告知。参加希望者への説明会実施。
2021/1/12	参加者に対する事前研修(zoomに使用方法や事前学習、グループ内の役割分担など)を本校教員が実施
2021/2/1	本番。本番後も事後指導あり。※現在進行中

カンボジアオンラインスタディツアー（海外研修の代替）【熊本県立熊本西高等学校】

昨年度より海外で活躍している方からの講話や平和学習を通して国際的な感覚と広い視野を持つグローバルな人材を育成するために、海外研修を実施している。今年度はシンガポールとベトナムを訪問する研修を予定していたが、その代替としてオンラインによるカンボジアのNPO法人SALASUSUとの交流を実施。2年生の希望者14名が参加し英語と日本語で研修を行った。

【プログラムの内容】

- ・事前学習としてカンボジアの歴史や教育問題についての学習と英会話指導を実施した。
- ・当日はSALASUSUの現地スタッフとの英語での意見交換、現地ガイドからのカンボジアの歴史についての説明があり、日本人スタッフよりカンボジアの現状についての講話があった。最後にSALASUSUで働く作り手の方たちと意見交換をおこなった。
- ・事後研修として学んだ事をまとめ、学年集会で発表した。

【工夫した点】

- ・カンボジアで、教育を受けることもできずに働く女性たちの現状を理解して研修に臨めるよう事前研修を実施した。
- ・現地の雰囲気を感じられるよう英語での交流を行った。英語が話せるSALASUSUのファクトリーツアーガイドを紹介してもらい、英語の学習法も紹介していただいた。
- ・現地で働く作り手の方との交流では、働く喜びや素晴らしい製品を作る誇りなどについて、「どう働くか」ということに焦点を当てて話していただいた。

【今後の課題】

- ・交流は一回だけであったため、調べ学習や事後指導など学びを深める機会がなかったため、今後はオンライン以外での交流も検討していく。

【経緯】

2019年（令和元年）7月	第1回海外派遣研修（シンガポール・ベトナム）
2020年（令和2年）7月	新型コロナウイルス感染症の影響により、第2回海外派遣研修の延期を決定。
2020年（令和2年）8月	オンラインでの海外研修プログラムの実施を検討。 カンボジアのNPO法人SALASUSUとの交流に決定、参加生徒募集。
2020年（令和2年）9月	カンボジアオンラインスタディツアー実施。
2020年（令和2年）12月	学年集会で学習成果を発表。



イングリッシュ・デイの取り組み（サイエンス情報科 1年） 【熊本県立熊本西高等学校】

令和2年度に開設されたサイエンス情報科ではグローバル人材育成の一環として、1年次にイングリッシュキャンプ、2年次にシンガポールへの修学旅行を計画している。本年度は校外でのキャンプが中止となったため、12月4日（金）に校内でイングリッシュ・デイを開催した。個々の英語力の向上とシンガポールについての知識を深めるため、ZOOMを活用し、県内ALTや本校ALTの協力を得て実施した。

【プログラムの内容】

- Singapore Lesson 1 :シンガポール出身のALT（山江村教育委員会所属）によるパワーポイントを使用したシンガポールについての授業。
- WEST High Presentation:40名の生徒を8班に分け、熊本西高等学校紹介を英語で実施。
審査員は本校ALTの友人（アメリカ在住・8名）。
- Singapore Lesson 2 :現地旅行会社スタッフによるシンガポール案内。

【工夫した点】

- 山江村教育委員会の協力で山江中学校とZOOMをつないだ。3か月前に依頼したことで準備の時間を十分とることができた。ALTによる工夫を凝らしたパワーポイントがとても素晴らしく、生徒の興味を引いた。
- プレゼンテーションでは8テーマ（History, Campus Tour等）から選び、作成には英語、情報の授業やLHRを活用した。GOOGLE SLIDEで作成し、生徒同士で同時に作業ができるようにすることで効率的に作業ができた。アメリカとの時差を配慮し、プレゼンテーションは現地の19時過ぎを目安に設定することで、本校ALTの友人が審査員として参加してくれた。
- 実際にシンガポールとつなぐことにより、現地在住の日本人の説明を聞き、シンガポールについて質問することができた。



【今後の課題】

- ICT機器の接続不良でスムーズにZOOMが繋がらなかったこともあり、ICT接続等に詳しい先生に協力を仰ぐ必要がある。
- 教科間の連携が必要。英語の授業だけでは準備不足。

【経緯】

2020年（令和2年）7月	新型コロナウイルスの影響によりイングリッシュキャンプの中止決定。イングリッシュ・デイに縮小。
2020年（令和2年）9月	山江村教育委員会へALTの協力依頼。シンガポール在住の旅行会社スタッフへの協力依頼。
2020年（令和2年）11月	本校ALTの友人にZOOMによる交流の協力依頼。WEST High Presentation作成開始。
2020年（令和2年）12月	イングリッシュ・デイ実施。

九州地区連携校との協働によるオードリー・タン氏とのシンポジウム開催【熊本県立熊本高等学校】

WWLカリキュラム開発の拠点校として、連携関係にある九州地区の高校6校の生徒を招待し、台湾のIT担当大臣であるオードリー・タン氏とのWeb会議を主催し、「近未来の教育について考える」というテーマで交流を行った。本校の生徒が中心になって交流を計画・実施した。またその様子は全国の視聴希望のあった学校等に同時配信された。

【プログラムの内容】

- ・オードリー・タン氏と話し、これからの世界の動きや学びの方向性への知見を得た。
- ・九州各県の高校生同士が、将来の世界への期待と世界を活躍の場としていく思いを共有できた。
- ・グローバルに活躍する人物と身近に接し、刺激を受けるだけでなく、具体的なアドバイスをもらった。

【工夫した点】

- ・前もって参加校の間で協議事項を検討するための準備Web会議を複数回行い、大きなイベントを開催する経験を積み、参加者が他者と協力して自主的に活動を行い成果につなげることができたという自信を持つことができるような機会となるように計画した。
- ・イベント後に今回の経験の成果や反省点を今後に生かしていくためのWeb会議も開催した。

【今後の課題】

- ・この交流により得た、他校や海外と緊密に交流する経験を生かして、積極的に外部とのコミュニケーションを行う姿勢を様々な場面で伸ばしていきたい。



【経緯】

2020年（令和2年） 7月	タン氏とのシンポジウムの計画を開始する
2020年（令和2年） 9～11月	参加高校間で準備会議を8回行う
2020年（令和2年） 11月16日	シンポジウム実施

他機関との連携による取組み【大分県教育委員会】 ※県立高校の生徒対象

<ALTオンライン・スピーキング・レッスン>

- ◎大分県教育委員会が提供する県内の高校2年生向けオンライン・スピーキング・レッスン。
- ◎県内ALT20名と生徒20名をタブレットで一斉にオンライン接続し、“1対1”のオンライン・スピーキング・レッスンを実現。生徒の英語発信力強化と新学習指導要領への対応を目指す。
- ◎令和元年度は、10～2月の間に県立22校の高校2年生1500名以上が受講（令和2年度は、新型コロナウイルス感染症に伴うALTの欠員により未実施）。

【プログラムの内容】

オリジナル教材に基づいた英検準2級レベルのやり取り：

- ①県教育委員会からALT及びレッスン実施校にオリジナル教材を送付（受講者は事前学習）
- ②ALTオンライン・スピーキング・レッスン（当日）→1人あたり20分程度
- ③県教育委員会から実施校に学校評価シート及び個人評価シートを送付
※評価シート：5つの指標で各ALTが評価（Attitude / Listening / Pronunciation / Grammar & Vocabulary / Contents + 自由コメント）
- ④実施校は評価シートの結果を生徒の英語発信力強化に向けた指導計画に反映



【工夫した点】

オリジナル教材のテーマを「SDGs」に設定し、17の目標に合わせて17種類作成（受講者はそれぞれの興味に合った教材でレッスンに参加）。

【今後の課題】

新型コロナウイルス感染症拡大に伴うALTの欠員 → 現地に滞在する着任予定のALTをオンラインで招へい（令和2年度中学生イングリッシュ・デイ・キャンプに5名が賛同し、遠隔参加）。



【経緯】

令和元年10月	ALTオンライン・スピーキング・レッスン（第1期）開始
令和2年2月	ALTオンライン・スピーキング・レッスン（第1期）終了
令和2年10月	ALTオンライン・アカデミック・レクチャー（第1期）開始 ※ALT不在校に対する“1ALT対1クラス”の特別レッスン（ALTオンライン・スピーキング・レッスンの代替手段）

他機関との連携による取り組み【鹿児島県 学校法人原田学園 鹿児島情報高等学校】

本校プレップ科は探究活動の実践の場として、1年次にはカンボジアで幼稚園や小学校でのボランティア活動（生徒手作りの遊具等を使って一緒に遊ぶ）を行い、2年次にはシンガポールで職場体験活動を行っている。今年度は新型コロナの影響で、海外研修はすべて中止となった。そこで、昨年度カンボジアへ行った現2年生に対し、本来ならシンガポール研修のための探究活動の時間を、カンボジア研修の完結編と題し、現地旅行代理店のスタッフの協力のもと、コロナ禍のカンボジアの現状を聞き、今、自分たちが日本から出来るボランティアについて企画、実行する時間を設けた。（現在進行中）

【プログラムの内容】

- ・テーマ「今、自分たちがカンボジアのために出来ること」
- ・活動内容の決定のために、昨年お世話になった現地代理店のスタッフにZOOMで、カンボジアの現状をお聞きし、自分たちが考えたボランティア活動は有効かどうかアドバイスを頂く。
- ・アドバイスを基に活動案の修正を行い、それぞれのグループ活動を進めていく。
- ・活動内容をプレゼンする。
- ・活動成果をカンボジアに還元する。



【工夫した点】

- ・現地代理店のスタッフとオンラインで繋がり、活動内容について適宜アドバイスやフィードバックをいただく点。



【今後の課題】

- ・3月17日にこのプログラムの完結（成果発表）を迎えるため、どのような形で完結するのかまだ未定であるが、生徒たちとカンボジアの両方にとってwin-winの結末となることを願っている。

【経緯】

2019年11月12日～18日	カンボジア研修旅行（現2年生）
2020年12月上旬	シンガポール研修中止の決定
2021年1月	カンボジア研修完結プログラム実施提案、カンボジア現地旅行代理店スタッフへの協力依頼
2021年1月13日～3月17日	カンボジア研修完結プログラム実施中

他機関との連携による取組み 【沖縄県立向陽高等学校】

本校では、日中交流センター主催の留学事業である心連心中国高校生を毎年1年間受け入れている。しかし、今年度は新型コロナウイルス感染症拡大のためプログラムが中止となった。その代替の取組みとして、月に1回程度、中国の南京外国語学校の日本語クラスの有志17名と本校中国語コース2年生の有志13名で相互の文化および多様性への理解を深めることを目的としzoomでのオンライン交流を行っている。

【プログラムの内容】

全5回のプログラム

- 第1回：自己紹介 ○第2回：動画を用いたの学校紹介
- 第3回：日本側提案テーマ（食品ロス）についてディスカッション
- 第4回：中国側提案テーマについてディスカッション
- 第5回：班ごとに解決策、アイデアについてプレゼンテーション、総括



【工夫した点】

- 第3回目のテーマである「食品ロス」についてより深いディスカッションができるように沖縄県環境科学センターより講師を招き、事前学習を行った。
- zoomのブレイクアウト機能を使い、参加者を少人数のグループに振り分けディスカッションを行った。

【今後の課題】

- さらに効果的に意見交換ができるように、次回の交流で話し合う題材についての知識やその際に必要な中国語を準備するための事前学習会を定期的に持つ必要がある。



【経緯】

2006(平成18)年9月	日中交流センター・心連心中国高校生の留学生1期生を受け入れる。
2020(令和2)年8月	日中交流センター・心連心中国高校生の留学プログラムの中止が決定。
同年9月	日中交流センター主催の中高校生対話のプログラムに応募、企画書提出、参加生徒募集。
同年11月～	月に1回程度zoomでのオンライン交流を開始。